

インキュバスエクスタシーShort Story

「ディフェルトの或る日」

或る日の夜、ディフェルトはバー「Is」にいた。

「あーら、ディフェルト、今日も男前ね」

声をかけてきたのは逞しい胸筋を見せつけるかのように
シャツをはだけ、怪しげに笑みを浮かべる男性だった。

「ニクラス」

「ちょっとお、ニクラスじゃなくて、ニコって呼んでって言うてるでしょう。」

見た目とは似つかわしくない言動にディフェルトの頬が少し緩む。

「悪かった。ニコ、何か用か？」

「…ディフェルト、あんたなんか感じ変わった？
丸くなったっていうか、 余裕があるっていうか…」

「そうか？」

「そうよ、あんたったら前だってブスーっとしながら…てそうじゃなくて！
仕事来てるわよ。
えーと、来月の8日の昼に訪問調理、
11日にマッサージの予約、それに12日も、
あと15日～17日、写真モデルで全日抑えたって、スケジュールいかが？」

「確認する…8日は問題ない、11日、12日は午後から別件だ。
午前中指定でOKかどうか確認してほしい。」

「オッケー、任しといて。写真モデルは？」

「ヌードはやらない、事前に衣装を全て写真で用意するなら検討すると伝えてくれ」

「あーら、そう。

うーん、事前に全チェックはちょーっときつくない？

クライアントも嫌がるわよ。」

「それなら断ってくれて構わない、他に回してくれ」

強気なディフェルトの対応に少し怯む

「なにってんの、あんたをご指名なのよ、他に誰がいるっていうの」

「ラージスにでも頼んだらどうだ。」

「あんな粗暴おバカに頼めるもんですか、大体、本人だって受けないわよ。」

ニクラスは悩むようにスケジュールに目を通した

「…分かったわ、なんとかそれで通すから、スケジュールは絶対に空けておいてね」

「助かるよ、ニコ」

「ああもう！その美貌で優しく微笑みかけないで、情緒おかしくなるわ」

ニクラスは大げさにその場に崩れ落ち、そのまま上目遣いに問いかける

「やっぱりあんた変わったわ。女ね、間違いなく。

白状なさい。」

「…自分ではそういうつもりはないのだが」

「ジーザス、正解だったわ…

相当入れ込んでるわね、どうなの？」

「程度なんて人それぞれだろう」

「はぐらかすんじゃないの！ノロケぐらい聞かせなさい！」

「はぁ…別に。

一緒に暮らして、料理して、買い物して、
夜は同じベッドで寝て、恋人なら普通のことしかしていない。」

「…」

「ニコ？ どうした？」

「…あんたがそれを普通って言ってることに驚いてるの！
様変わりしすぎて追いつけないわよ、もう…」

「言われてみれば…そうか、僕が変わったのか。
そうかもしれないな。」

「はい、もうお腹いっぱい、話はまた次回聞かせてもらうわ。」

「そうだニコ、ひとつ教えてくれないか。」

「なあに？」

「ラージスは、人間界に降りてきているか？」

ディフェルトのさきほどまでの口調とは違い緊張感を含む言葉に、
ニクラスも応える。

「ええ、今、来てるそうよ、アタシは直に連絡はできないけど
詳しい場所くらいなら探れるわ。」

「そうか…
いや、構わない。あとは自分で探すさ」

「了解、それじゃお仕事よろしくね、また会いに来るわ。」

「ありがとう、ニコ。」

「いーえ、アタシにできることならなんでも言ってちょーだい。
…ほんと、良い変化よ、ディフェルト。
また次に会うのが楽しみだわ、バーイ。」

楽しげな足取りでニクラスは店を後にする。

ディフェルトは手元に置いてあるカクテルを一口含み、呟く。

「まあ、悪い変化ではない、か」

「なーにブツブツ言ってやがんだ。」

高圧的で自信満々な態度で、彼は目の前のテーブルに肘をつく。

「ラージス…」

「俺を探してたんだろ？手間が省けたな、何の用だよ。」

「分かりきっている事を聞く趣味があるのか？」

「ははっ、敵意むき出しじゃねえか。
そうそう、俺はそーゆーお前が気に入ってんだ。」

「僕のターゲットに手を出すな。お前に拒否権はない。
話は以上だ。」

「つーめてえなあ、もうちょっと話そうぜ。
大体な、その言い分は無理があるって分かってんだろ？」

「…なにがだ」

「とぼけんな。
もうてめーは淫魔じゃねー。」

「…だからなんだ。」

「俺はもう確認してんだよ、てめー、あいつと最後までしてねーだろ。
だから俺が奪うのに問題はねー。」

「馬鹿が、僕の性印が耳についていただろう。
その上でターゲットを奪うことは完全に違反行為だ。」

「はっ、淫魔じゃなくなったって有効だとでも？
てめーほどのオツムで分かんねーわきゃねーんだよ。
性印はあくまで次の吸引を約束するだけの印だ、
吸引もできねー不能野郎にその権利はねーよ。」

ディフェルトの目の鋭さが増す。

「…ラージス、警告するぞ。
ルールなど関係ない、彼女は僕のものだ。
今後、手を出さないと誓え。」

「…良い顔すんじゃないか、わざわざ降りてきた甲斐があるってもんだ」

「誓えないのなら、全力でお前を叩き潰す。」

「…今のお前と俺で勝負になるとってんのかよ？」

「お前こそ去勢を張るな、力がなくなっても
本調子とは程遠いことくらい見て取れる。」

「ははっ、最高じゃねーの。
言っとくが、俺もあいつを諦める気は1ミリもねえ。」

「交渉決裂だな」

静かな店内に調子の良いピアノの音色が聞こえてくる。

ラージスはため息をつきながら

「決着は近いうちにつけにくる。ここじゃあまずいだろ。」

「…」

「じゃあなディフェルト。次に会えるのを楽しみにしているぜ」

立ち去ろうとするラージスに声をかける。

「ラージス」

「あ？

んだよ、まだなんかあんのか。」

「彼女の件とは全く別の話だ。

それを踏まえて聞け。」

「だから、なんなんだよ。」

ディフェルトは少し俯きながら、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「…苦勞をかけて、すまない。」

「…へっ、バーカ」

ラージスが去った後

ディフェルトは一人、店内でゆっくりとグラスを傾けた。

彼の赤い瞳がカクテルの水面に映る。

ゆらめくそれは、まるで静かに燃える炎のように見えた。